
チェンジ・スタッグビートル

blackbeat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チェンジ・スタッグビートル

【Nコード】

N4253J

【作者名】

blackbeat

【あらすじ】

加賀美新・25歳。
会社員。

仕事はいつも全力投球！

憧れの岬部長、親友・天道との友情、そして…

第1話（前書き）

「仮面ライダーカブト」のキャラクターを使用した社会人ドラマです。

原作とは年齢や性格設定が微妙に異なり、もちろん「変身」はしません。

お暇なときにもドウゾ。

第1話

「わかった？加賀美くん」

上司である岬佑月から書類を渡され、加賀美新は頭をかきながらそれを受け取った。

いたるところに手直しの添削が入った企画書は、加賀美が自作した新商品の資料だ。

岬のデスクから離れ、自分の机に戻った加賀美は、ふう、と息をついた。

ダメだしとはいえ、岬と間近で会話できた時間は加賀美には至福の時間だった。

添削だらけの書類も、岬の甘い香りが残っているような気すらしてくる。

妄想についニヤニヤしてしまう自分を加賀美は懸命にこらえた。

「せんぱい、ご機嫌ですね」

前の席の高取蓮華が不機嫌そうに口を開いた。

「な、なんだよ。そんなわけないだろ」

さっきまでの妄想を取り繕うように加賀美は書類を片付けた。

「ほとんど手直ししなきゃいけないんだからさ」

「そんなこと言って、憧れの岬部長と会話できて嬉しいんじゃないですか？」

ニコリともせず蓮華が言う。

完全に図星なのだが、加賀美は否定するしかない。

「ちょっと…何言っただよ高取。なわけねーだろ」

「どうだか。岬部長と話したいからわざと手直しされるような書類作ってんじゃないですか？いやらしい」

嫌味っぽく蓮華が言う。

「うるせーな。仕事しろ、仕事」

だが蓮華はやめない。

「そこいくと、天道さんはステキですよ。とてもせんぱいと同期とは思えない」

天道総司

加賀美の脳裏に開発部の男の顔が浮かぶ。

「イケメンだし、仕事もできるし、どうせならあたし天道さんの前の席がよかったなあ」

天道は、加賀美とは対照的な男だった。

クールで自分の感情を表には出さないが、不思議と加賀美と馬が合った。

両親を早くに亡くし、妹と二人暮らしだというそんな境遇が、やはり親のいない加賀美と共感できたのかもしれない。

「ちょっと、せんぱい聞いてます？」

蓮華をいつの間にか無視していたようだ。

加賀美は蓮華に目を向けると、「ああ」と応えた。

「おまえが天道に入れ込んでる話ならもういいよ」

「あたしだって、せんぱいが岬部長に夢中だって話はもうたくさんです」

「だからなんでそんな話になるんだよ!」「うるさいわよ加賀美くん!」

岬の声が響く。

「はっ…スイマセンでしたあ〜っ!」

加賀美はイスから立ち上がり最敬礼した。

苦笑まじりに目で返すと岬は何事もなかったように机に向かう。

窓からの陽光が反射し、岬の肢体をキラキラと輝かせる。立ったまま岬に見とれてしまう加賀美を、蓮華はため息まじりに見つめていた。

そのまなざしは、先程まで加賀美へ向けていたそれと異なる、真剣みを帯びた視線だった。

第2話（前書き）

天道総司が登場します。

第2話

「できました、岬さん」

加賀美がプリントアウトした書類を岬の机へ持参した。

岬は何も言わずに受け取るとチェックを始める。

そんな岬を加賀美はじつと見つめていた。

窓の外からの夕焼けという背景は、岬の美しさを更に引き立てている。

胸の高鳴りを自覚しながら、加賀美はまたも岬に見とれていた。

「…くん、加賀美くん！」

我にかえった加賀美に、岬が書類を差し出す。

「やればできるじゃない。この感じで進めていいわよ」

「ほんとですか！」

岬から渡された書類には大きく赤い丸がつけられていた。

「やったぜ」

小さく呟きながら自分の机に戻った加賀美とは逆に、なぜか蓮華は不機嫌だった。

「…よかったですね」「ああ、ありがとう。これ見ろよ、これ」

加賀美は赤い丸のついた書類を蓮華に見せた。

「…バツカみたい」

赤い丸を一瞥して、蓮華はすぐに書類から目を離す。

「なんだよ？おれが赤マルもらったのがそんなに気に入らねえってのかよ」

加賀美は書類を手元に戻しながら蓮華に悪態をついた。

だが蓮華は加賀美から視線を外していた。

ある男が入ってきたからだ。

開発部の天道総司である。

「あ、天道さん！」

さっきまでの態度とはまるで異なる蓮華の豹変ぶりに今度は加賀美が呆れた。

天道は蓮華に会釈だけすると加賀美に近寄ってきた。

開発部の天道は、営業の加賀美とは別フロアで働いている。

「加賀美、来週空いてるか？」

「あ、あたし空いてます！」

蓮華が手を挙げる。

天道は蓮華に微笑を返すと、加賀美に向き直った。

「すまないが、加賀美に手伝ってほしいんだ」

「…そうですか…」

加賀美は蓮華の表情を見て複雑な気持ちになりながら天道を見た。

「おれなら大丈夫だ。何をすればいいんだい」

天道は頷くと

「来週うちの家に来て欲しい」

と答えた。

これに蓮華が再び反応する。

「天道さんのおうち？あたしも行きたいですう」

「高鳥さんには申し訳ないが…」

天道がすまなそうな顔を蓮華に向けた。

「いいじゃないか天道、うちの高鳥はいつもおまえの話をしているんだ。招待するぐらい構わないだろ」

加賀美の言葉に天道と蓮華が驚きの表情を見せた。

特に天道は困惑している。

「な、何言い出すんですかせんぱい。ちょっと言ってみただけですから！て、天道さんもすいませんでした」

慌てて蓮華が加賀美の提案を遮った。

天道は蓮華をいったん見て、再び加賀美に顔を向けた。

「じゃ、来週。何をするか、は来てからのお楽しみだ。またな」

それだけ言つと天道は蓮華に頭を下げて出て行った。

天道が去つたのを見届けると、蓮華は加賀美に向き直った。

「あの…さつきは、ありがとうございました」

「あ？何が？」

「天道さんに…言ってくれて」

「ああ、いつもおまえの話をしている、てやつか。本当の話だから」

「ちがいます。天道さんに招待してやれ、て話です…」

少し俯きながら、伏目がちに蓮華は加賀美を見た。

「ああ、おれは何回も天道の家行ってるからさ、たまにはおまえもどうかなくて。まあでもあれか、おれと一緒に嫌だよな」

「いえ…そんな、あたしは…」

言いかけて蓮華は慌てて否定した。

「そ、そうですよ。せっかくの天道さんの家なのに、せんぱいとなんか行ってるらないです。だから、せんぱいもこの件で岬部長に對するフォローをあたしがするとか思わないでくださいね」

「バツ…だから、なんでそんな話になるんだよ！」

「うるさい、加賀美くん！」

岬の声に再び最敬礼をする加賀美だった。

第3話（前書き）

天道樹花が登場します。

第3話

加賀美たちの勤める株式会社ゼクトは、ソフトウェアメーカーである。

その営業部に所属する加賀美は、入社3年目。

大学卒業当時は、ソフトウェア開発の知識こそなかったものの、その持ち前の明るさと学生時代に在籍していた野球部で培った根性で今日まで数々の実績をあげてきた。

もちろん、その影には上司である岬の存在が大きい。

岬と初めて出会ったのは2年前。

親会社から営業のテコ入れとして出向してきた岬を、加賀美も最初は侮っていた。

実際それまでのゼクトの先輩社員は、口先だけの営業理論のみで実践ではアポの一つも取れない者たちばかりだったからだ。

しかし、岬は違った。

その仕事ぶりはもちろん、社会人としての教養や知識、男性社員顔負けの行動力に加賀美は舌を巻いた。

何より岬は美しかった。

外見もさることながら、内面からにじみ出る雰囲気彼女の美しさを引き立てていた。

そんな岬に加賀美は惹かれていった。

岬に認められたい一心で加賀美はゼクトでがんばってきたのである。

加賀美が天道の家に行く日がきた。

加賀美は11時前に着いた。

天道から昼食と一緒に食べようと提案されていたからだ。

天道が自分を自宅へ招く時はいつもそうだった。

彼が料理を振る舞ってくれるのだ。

しかもその味は、玄人はだし。

そんな天道の手料理は加賀美にとって天道邸訪問の楽しみでもあった。呼び鈴を鳴らすと中から女の子の声がして、しばらくしてから「いらつしゃい、加賀美さん」の声とともにドアを開けて女子大生が顔を出した。

天道の妹の樹花だ。

「こんにちは、樹花ちゃん」

加賀美は樹花に挨拶すると、室内に目をやった。

天道が奥から姿を見せる。

「やあ」

天道がテーブルを拭きながら出迎えた。

「今日の料理は、樹花が担当したんだ」

「そうなのか？」

意外そうな顔で加賀美が樹花を見た。

「えへへ…」

恥ずかしそうに樹花が笑う。

4歳違いの天道の妹は、紅い頬が特徴的な可愛さに満ちていた。

「樹花に好きな男ができたみたいでさ、そいつに手料理を食べてほしいって」

「や、やだお兄ちゃん。その話内緒にしてって言ったのに」
樹花が頬を真っ赤にして兄に抗議する光景を加賀美は微笑ましく思った。

「なるほど、そのための練習台ってわけか。樹花ちゃんの料理を食べるのは初めてだし、喜んでいただくよ」

「そういうわけだ。だが、その前に見てほしいものがあるんだ」

天道は加賀美を促して別室へと進んだ。

部屋にはパソコンが置いてあった。

天道が愛用しているそのマシンは、加賀美にもおなじみだった。

「新しいソフトか？」

加賀美が尋ねると天道はニヤリと笑ってパソコンを立ち上げた。

「ああ。岬部長に頼まれてね」

その言葉に加賀美は色めき立った。

「岬さんから？」

パソコンは駆動音を響かせながら、命が吹き込まれ、二人の間のディスプレイに静かに光が灯った。

第4話（前書き）

感想ありがとうございます。

天道の家でのおはなしです。

第4話

「これはまだオフィシャルにはなっていないんだが…」

パソコンが機動すると、天道は一枚のCD-Rをドライブに挿入した。

「これは？」

加賀美の問いに天道がマウスを動かしながら答える。「岬部長の発案で俺が開発した業務支援ツールだよ。この不況で、新商品はまず売れないから、既存顧客を囲い込むのが目的だそうだ」

顧客管理や見積作成など、業務に必要なツールがセットになった業務支援ソフトは、既にゼクトの商品を使っているユーザーを対象として展開を考えているのだという。

「これを岬さんが？」

「そうだ。岬部長からうちの田所さん経由で俺に話がきてな。…もつとも、さっきも言ったがこれはまだ内密の話だ。正式にゼクトの商品として認可がおりたわけじゃない」

天道の発言に加賀美は眉をひそめた。

「なぜ？」

「岬部長が元いたネイティブという親会社は、新規開拓が社是だからな。こんな内向きな企画を上にあげただけで岬部長は更迭されかねんよ」

「…そうか」

「だが岬部長は、現状を打破するためにはこのソフトを展開したい。それで、ある程度の状態にまでこのソフトを形にしておきたいんだ」

開発に係わる経緯は加賀美も飲み込めてきた。

「…なるほどな。で、おれは何をすればいいんだ？」

「このソフトのマニュアルを作ってほしい。俺が作ってもいいんだが、おまえのほうがいいマニュアルが作れると思うんだ」

加賀美に異存はなかった。

もとより、岬が関係しているとなれば加賀美に断る理由などない。

「わかった。まかせてくれ」

加賀美は即答した。

「ありがとう。だが、この仕事は今の段階では完全な「業務」とはいえない。本業との合間にやってもらうこととなるが…」

「気にすんな。それよりいつまでにやればいいんだい？」

「2週間後のネイティブの経営会議までに、だ。あまり時間があるとはいえないが、岬部長はなんとしてもその会議にこのソフトを提出したい。ネイティブの上層部を納得させるには、会議の段階である程度状態にまで完成させておくことが必須なんだ」

天道が絞り出すように加賀美に言った。

「すまないが、頼む…」

「気にすんなって言ったる。付き合ってる彼女も待ってる家族もいないんだから、残業ぐらいいくらでもやるぜ」

加賀美の答えに天道は安堵の表情を浮かべた。

「だけど天道、そういう話なら、どうして高鳥を外したんだ？」

天道に憧れている蓮華なら、きっと喜んで協力するはずだ。しかし、天道はかぶりを振って答えた。

「この話は内々に進めたい。あまりオープンにしたくないんだ。おまえが高鳥さんに手伝わせたいなら何も言わないが、できれば今の段階ではあまり広めたくない」

天道の意見は正論だったが、この言葉を蓮華が聞いたらどう思うだろう？

加賀美は釈然としないものを感じながら、しかし天道に同意した。

「よし、決まりだ。樹花の料理の後に、細かい打ち合わせをしよう」
言いながら天道がドアを開ける。

目の前のテーブルにはサラダが人数分並んでいた。

「あ、お話終わった？お兄ちゃんと加賀美さんはそこで座って待ってて」

樹花がスープ皿を持って姿を見せた。

「ああ」

加賀美は天道と横並びに座った。

その前に樹花の作ったスープが並べられる。

「これ、樹花ちゃんが？」

「うふふ…驚いた？」答えながら樹花も加賀美の向かいの席に座った。「…と言いたいけど、スープはインスタントなんだ。でもサラ

「ダは私が作ったんだよ。メイン料理もね」

サラダは野菜とポテトのありふれたものだった。

樹花は、加賀美の前にあるサラダにペットボトルに入ったドレッシングをかけた。

「これは樹花特製のドレッシング。お兄ちゃんに教わりながら作ったんだ。さ、食べてみて」加賀美はフォークをサラダの野菜に突き立て、口へ運んだ。

ドレッシングの甘みが口の中に広がる。

「おいしい。おいしいよ、樹花ちゃん」

加賀美の答えに樹花は顔をほころばせた。

「ほんと？うれしい！」

「ああ。な？天道」

天道も笑いながら応じる。

「じゃあ、次は、メイン料理持ってくるね。食べながら待ってて」樹花が嬉しそうにキッチンへと走る。

「おまえもかなりのもんだけど、樹花ちゃんもなかなかやるな」
「料理か？」

「ああ。ドレッシングはレシピだけでカネとれそうだ」

「…よせよ。言い過ぎだ」

運ばれてきたメイン料理は、ステーキだった。

もちろん焼き方や味にも手拔かりがない。

加賀美は思わぬご馳走に舌鼓を打ちながら、正面を見た。

そこには、うつとりとしながら加賀美を見つめている樹花がいた。

第5話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーに勤める加賀美新は、ある日同期の天道総司に頼まれて彼の家までやってきました。

天道は加賀美にあるソフトのマニュアル作りを依頼します。

そのソフトが憧れの岬佑月の発案と知るや加賀美はマニュアル作りを快諾します。

そんな加賀美に、天道の妹の樹花は、「好きな人に食べさせる練習」として手料理を振る舞うのですが…。

第5話

樹花は加賀美に笑顔に向けた。

「うふふ…加賀美さんだったらとっても美味しそうに食べるのね」

「だってうまいからだよ。これなら、樹花ちゃんの好きになった男だってイチコロだな」

加賀美が屈託なく樹花に言った。

「…そ、そう？」

樹花が戸惑いの表情を見せる。

「ああ。間違いないね。おれが請け合うよ」

「あ、ありがとう…」

樹花の表情が一瞬曇った。

だが加賀美はそれに気付かず続ける。

「こんなにおいしい食事が作れるんだ。うまくいくように応援するよ、樹花ちゃん」

「ありがとう。加賀美さんにそう言ってもらえたら心強いわ」

だが、言葉と裏腹に表情は笑っていなかった。

「コーヒー入れるね」

樹花は再び席を立った。

コーヒーを用意しながら、小さな声で呟く。

「…加賀美さんのばか…」

その日の午後、加賀美は天道と細かい打ち合わせをした。

新しいソフトはメディアに焼いてもらい、会社のマシンにインストールすることにした。

もちろん、まだまだ詰めるところはあるが、岬のためにも加賀美は意気込んでいた。

「よし、また月曜な」

メディアをしまいながら帰り支度をする加賀美に、天道が声をかける。

「おまえさ、意外に鈍感なんだな」

「ん？何が？」

「樹花のことだよ。おかしいと思わないか」

「そりゃ好きな人の話をいきなりされたら平常心じゃいられないって」

「…はあ」

天道は溜め息をついた。

「樹花の問題だから、俺はどうこう言わないけど、おまえって、そういうところで損してると思うぞ」

「？…まあ、樹花ちゃんの料理がうまいことはわかったぞ？」

「…もういい。また月曜な」

玄関まで、天道と樹花が見送りに来た。

「あの…加賀美さん、また来てね」

「ああ。また来るよ。じゃあ」

天道兄妹に手を振って、加賀美は家を出た。

月曜日。

加賀美はさっそく天道からもらったソフトを会社のマシンにインストールしていた。

帰宅してから自宅のマシンにもインストールして、ある程度のポイントは既に掴んでいるが、実際にマニュアルを作るとなれば、見るべきところは無数にある。

「おはようございます、せんぱい」
蓮華がやってきた。

「週末はどうでした？」
「天道の家か？」
「ええ。いろいろ聞かせて下さいよ、天道さんのおうちのこと。そもそも何しに行ったんです？」

加賀美は迷った。
天道から言われたことを反芻する。
まだこのソフトのことは蓮華には言うべきではないだろうが…。

「あ、ああ、食事をね」
「食事？天道さんの手料理ですか？いいな。あたしも食べたかった」
「いや、天道の妹が作ってくれたんだ」
「妹？」
蓮華の表情が変わった。

「天道さんって妹さんいたんですか？」

「ああ。樹花ちゃんっていうんだけどね。それがスゲエ料理うまいのよ」

「…いくつ？妹さん」

蓮華は更に不機嫌になりながら加賀美に質問した。

「4つ下だったかな…。確か21か2だったと思うけど」

「ふーん…。そんな若い子の手料理を食べに行つたんだ」

「いや、まあ、そういう言い方をするとアレなんだけど、そういうところだな」

蓮華は加賀美から視線を逸らしながら

「せんぱいって、結構節操がないんですね」

「は？どういうことだよ」

「岬部長、岬部長って言うてるくせに、天道さんの妹さんの手料理食べて「うまい」なんて。やっぱり若い子がいいってことですか」
蓮華の機嫌がなぜ悪いのか理解できないまま、加賀美も応える。

「ちょっと待てよ。樹花ちゃん好きな奴がいるんだよ。そいつに食べさせる料理の練習でだな…」

「だからってどうしてせんぱいなんですか？天道さんがあたしじゃなくてせんぱいに頼みたいことって、妹さんの手料理を食べさせることだったんですか？」

「まあ…そう…かも、な」

「何よ、若い子に手料理振る舞ってもらって喜んじゃって。さぞかしよかったですわねえ。ふん、樹花ちゃん、なんて呼んじゃってさ」

「お、おい高鳥…。おまえどうしたんだよ」

「なんでもありません。仕事します」

それきり、蓮華は不機嫌なまま一日が過ぎた。

加賀美は、天道にインストールしてもらったソフトを弄り、マニュアル作成に取り掛かりながら、向かいの席の蓮華を気にしていた。しかし、その蓮華の表情に、時折悲しげな色が浮かんでいることに、加賀美は気付くことはなかった。

第6話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーに勤める加賀美新は、同期の天道総司から自宅に招かれ新しいソフトのマニュアル作りを依頼されます。憧れの岬佑月発案と知った加賀美はマニュアル作成を快諾、作業に取り掛かることを決めました。

加賀美の後輩である高鳥蓮華は、加賀美に天道の家での出来事を質問しますが、加賀美からは天道の妹・樹花から手料理を振る舞ってもらったという話を聞きます。

そんな話を聞いた蓮華は、機嫌を悪くしてしまうのでした。

第6話

三日が過ぎた。

加賀美は毎日残業してマニュアルを作っていた。作るマニュアルはA4の用紙にして50枚程度、約100ページという構成だ。

作業はそれなりに捗っているが、やはり通常業務と平行しての作業は時間外にやるしかない。

「お疲れ様でした」
蓮華が席を立った。

彼女はいつも19時までには退社する。
加賀美も、週に1、2回は同じぐらいの時間に出ていたが、ここ最近はずっと残業だ。

「大丈夫ですか？」
蓮華が心配そうに聞いてきた。

「ああ」とだけ答え、すぐに机に向う加賀美。

無然とした表情で蓮華は退社していった。

蓮華を見送って、加賀美は息をついた。
まだ完成度は30%程度だ。
時間は足りないが、しかしやるしかない。

加賀美は再び机に向き直った。

「あまり根詰めないほうがいいわよ、加賀美くん」
営業部長の岬佑月がコーヒーを持って立っていた。

「み、岬さん…」

反射的に加賀美は立ち上がった。

「フフ…いい加減にそれ、やめてくれないかな」

岬は加賀美に座るよう指示して、コーヒーを加賀美の机に置いた。
形のよい指と整えられた爪、コーヒーとの絶妙なコントラストに加賀美は目を奪われた。

「よかつたら飲んで。私のおごり」

加賀美の隣にイスを持ってきて腰を掛けながら岬が言う。

岬の甘い香りが加賀美の周囲に漂う。

加賀美はドギマギしながら岬を見た。

「天道くんから聞いたわ。マニュアル作ってくれるって」

「は、はい…」

言いながら岬はディスプレイに顔を近付ける。

その横顔にまたも見とれてしまった加賀美は我にかえって慌てて席を立った。

「何よ？逃げなくてもいいじゃない。取って食いやしないわよ」

「は…」

加賀美は照れながら再びイスに座った。岬は笑いながら再びディスプレイに目を移した。

「これ、今でどれくらい？」

「ハッ…完成度では30%といったところであります」

岬はしばらくディスプレイを眺め、
「じゃあ、できてる分まででいいから、プリントアウトして。また明日よく見せてもらおうわ」

「は、はい」

岬は席を立った。

「ちょっと見たただけだけど、いいマニュアルができそうね？期待しているわ」

岬は微笑んで加賀美に言った。

「は、はい！ありがとうございます！」
立ち上がって加賀美もそれに応える。

「だからやめなさいって。それと、あまり遅くならないようにね」
岬は手を振って帰っていった。

岬が自分を気にかけてくれている…加賀美にやる気が湧いてきた。
そして、こんな機会を与えてくれた天道に心の中で感謝をしていた。

最高のマニュアルを作る、そして岬にもっと近付きたい。

岬から買ってもらったコーヒーを手に、加賀美はマニュアル作りに再び対峙した。

そして、仕事に没頭する加賀美は、岬と入れ替わりに蓮華がフロアに戻ってきたことに気付かなかった。

第7話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーの営業マンである加賀美新は、同期の天道からあるソフトのマニュアル作りを依頼されます。

憧れの岬佑月のため、さつそくマニュアル作りに取り掛かる加賀美でしたが、後輩の高鳥蓮華に作業内容を伝えられず、残業しながら作業を進めることになりました。

そんな加賀美に岬はコーヒーをプレゼント、岬に褒められ、加賀美はさらにやる気を燃やすのでした。

第7話

高鳥蓮華は大学進学と同時にこの街へ来た。

幼い頃より家族との仲が悪く、自立すれば家を出るつもりだった。大学卒業と同時に入った会社は上司からのセクハラが原因ですぐに辞めた。

蓮華自身は人当たりの良い女性だったため、持ち前の明るく前向きな人柄が評価され、ゼクトに入っただのが半年前。

加賀美新と同じ営業部に配属され、今日に至っていた。

「せんぱい」

フロアに入ってきた蓮華は、加賀美に声をかけた。

加賀美は持っていたコーヒーの缶を落としそうになっている。

「あはは…そんなに驚かなくても」

「な、なんだよ高鳥、どっからわいてきたんだ。ていうか帰ったんじゃないかったのか」

狼狽しながら加賀美が蓮華を見た。

「うん。でも気になって戻ってきちゃいました」
言いながら蓮華はコーヒーを差し出した。

「もう買ってたみたいですけどね…」
「ああ、岬さんが買ってくれたんだ」

「……！」

蓮華は表情が変わるのがわかった。

しかしこの状況で不機嫌になる意味がわからない。自分から「気になる」からと戻ってきておいて、岬の名前が出ただけで不機嫌になるのはどう考えても不自然である。

「そ、そうでしたか。よかったですね。で、何やってんですか？」

「おまえこそ、何やってんだよ」

加賀美が怪訝そうに蓮華を見た。

「べ、別に。ちょっと気になったから、何やってんのか……」

「そうか。確かに気になるよな、何やってるか」

加賀美は机に向き直った。

「それも…そうなんですけど…せんぱいが…気になって」

「なんだよ、気持ち悪いな」

加賀美は苦笑いしながらマシンをスリープ状態にした。

「毎日遅いみたいだし、体…大丈夫なんですか？」

蓮華は加賀美が心配だった。

ここ数日、疲労がたまっているようにも見える。

「あたしが手伝えることあったら…と思って」

気がつくと、フロアは加賀美と二人きりだった。

蓮華の胸の鼓動が高鳴る。

別に大したことを言ってるわけでもないのに、蓮華はドキドキしていた。

「だから気持ち悪いって。どうしたんだよ？いつものおまえらしくもないな。何か今日はしおらしくなっちゃまって」

加賀美は屈託なく言った。

そんな加賀美に蓮華は腹がたってきた。

「何よ！人がせっかく心配してあげてるのに、そんな言い方ばかり！あたしなんかより岬部長に心配されたほうがよっぽど嬉しいんでしょ、どうせ」

「お、おい……」

加賀美がオロオロと蓮華を見ている。

「もういいです。あたし、帰ります」

蓮華は踵を返してドアのほうへ向かった。

「高鳥！」

加賀美がそんな蓮華に声をかける。

「なんですか？」

蓮華は振り向きもせずに答えた。

「その…ありがとな。それと…ごめん。なんか、おれって、いつもおまえを怒らせてるよな…」

加賀美が頭を下げてるのが蓮華にも伝わってくる。

「ほんとに、悪いって思ってます？」

蓮華は振り向いて加賀美を見た。

「ああ」

「じゃ、何やってるか教えてください」

これには加賀美が戸惑いの表情を見せた。

しかし蓮華は知りたかった。

加賀美が何をやっているのか。なぜ自分には教えてくれないのか。蓮華は、うすうすこの仕事が岬が関係していることを感じていた。加賀美が残業までして取り組むとなれば、岬が絡んでいないと考えるほうが不自然だ。

「…岬部長が関係してるから、あたしには言えないんですか？」
蓮華は思わず口にしていた。

加賀美はそれには答えなかった。
そのかわりに、さっきスリープにしたマシンを再び起動させた。

「…わかったよ」
加賀美は言いながらパスワードを打ち込んだ。

第8話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーの営業マンである加賀美新は、同期の天道総司からあるソフトのマニュアル作りを依頼されます。

そのソフトが憧れの岬佑月発案と知った加賀美は快諾、更に岬から激励され、俄然やる気になります。

しかし、残業で何をやっているのか、そして残業続きの加賀美が気になる後輩の高鳥蓮華は、残業中の加賀美を直撃するのです。

第8話

その日、加賀美は蓮華に全てを話した。

蓮華に気を遣ったわけではない。

ただ、そうしなければならぬような気がしただけだ。

「…というわけで、おれはこのマニュアルを作らねばならなくなつた。わかつた？」

「…わかりました。あたしも手伝います」
「は？」

加賀美は驚いた。

「待てよ。おまえに手伝わせるために話したんじゃないやねえよ。何やつてるか気になると言うから、話したんじゃないか」

「つまりもう気にするなつてことですか？ダメですよ、そんなの。天道さんのためにも、あたし絶対手伝います！」

蓮華がまっすぐな目で食い下がった。

だが加賀美は譲らない。

「だめだだめだ！とにかく、今日は帰れ。な！」

「せんぱいは？せんぱいが残るならあたしも残ります」

時計は8時を過ぎていた。加賀美は、いつももつと遅くまでやっているが、このまま蓮華とやりあつても仕方ない。

「わかつた。今日は帰ろう。だからおまえも帰れ」

「…わかりました」

とりあえず今日のところは帰ろう。

加賀美はそう思った。

しかし明日はどうする？加賀美が岬絡みでやる気になっているのと同じで、蓮華も天道が関係しているとなれば、やる気が漲るのはやむをえない。

それを止めるのは並大抵のことではないだろう。

加賀美が帰り支度を終えるまで蓮華は待っていた。

「あたしが帰ったら、また続けるつもりなんでしょ」

「今日はもうしないよ。帰るぞ」

加賀美はマシンの電源を落とし、鞆を持ってドアに向かった。

蓮華が慌ててそれに続く。

フロアの鍵をかけたあと、加賀美は蓮華に向き直った。

「じゃ、おれはカギを守衛さんに渡してくるから、おまえは先に帰れ。お疲れ様」

しかし蓮華は言うことを聞かない。

「イヤです。そんなこと言って、また戻ってくるつもりなんでしょ？あたしもついて行きます」

「わからん奴だな、おまえも…。そんなめんどくせえことするわけないだろ」

「とにかく、あたしも行きます」

結局、加賀美は蓮華とカギを返しに行くことになった。

守衛室で退社時間と名前を記入するが、天道たちの開発部の部屋は

まだ記帳がなかった。

天道に悪い気がしながらも、加賀美は蓮華を連れて外へ出た。

「せんぱいといっしょに帰るのって2回目ですよね」蓮華が加賀美の後を追って来る。

二人の家は意外に近いところにあった。

同じ沿線で駅が二つ離れているだけで、蓮華のほうがり遠い駅に住んでいた。

「2回目…?」

「うん。初めての時は、あたしの歓迎会の時ですよ。忘れました?」

蓮華の歓迎会。

加賀美は思い出した。確かにあの時は加賀美と蓮華は一緒に帰った。だが、あの時は…

「おまえ酔ってたんじゃないっけ?」

「酔ってても、せんぱいと帰ったことぐらい覚えてます。なんたつて襲われるかもしれないんだから」

「誰がおまえなんか」

言いながら加賀美は蓮華の歩調に合わせてペースを落とした。

蓮華は、気になったことが解決したからか上機嫌だった。

そのまま二人は駅まで歩き、電車に乗った。

とりとめのない話をして加賀美の降りる駅に電車が止まった。

しかし、加賀美は降りようとしなない。

「…せんぱい?」

「おまえの家まで送るよ。また会社に戻るとか思われたくないからな。それにもう遅いし…。まあ、おまえが嫌なら次で降りるけど」蓮華は一瞬キョトンとしたが、

「仕方ないから送らせてあげますけど、せんぱいが送りたい、て言っただけだからね。それと、変なことしたら承知しませんから」と答えた。

そう言いながらも蓮華の表情は明るい。

「だから誰がおまえなんか」

加賀美はそれきり車窓の流れる景色に目を移した。

二人を乗せた電車は、やがて蓮華の降りる駅へと近付いていた。

第9話（前書き）

（前回まで）

新しいソフトのマニュアル作りをすることになった加賀美新は、憧れの女性である岬佑月に激励され、やる気を燃やします。

そんな加賀美が気になる後輩の高鳥蓮華は、加賀美から作業内容を聞き出しますが、手伝うことを拒否されてしまいます。

なんとか手伝いたい蓮華をなだめようと、加賀美は彼女を家まで送っていくことにしました。

第9話

蓮華の住む駅に着いた。

蓮華は加賀美が電車を降りるのを確認して、電車から降りた。

改札を抜ける際も、蓮華は加賀美を先に行かせて、本当に降りるか確認をする。

「なんでおれが先なんだよ。おまえの家知らないんだからさ」

「あ、ごめんなさい」

蓮華は慌てて加賀美に追いつくと、先導するように歩き始めた。

「確か、おまえの家って駅からちよつと遠かったよな」

「はい。でも10分ぐらいですよ」

蓮華はかなり上機嫌だ。

こんな蓮華を見るのは加賀美も久しぶりだった。

「ねえ、せんぱい…。あたしの歓迎会以来ですよ、送ってくれるのも」

「あ？ああ、そうだな」

上気したような顔で蓮華は加賀美を見た。

「あの日、かばってくれてありがとうございました」
「なんだよ？いきなり」

加賀美は蓮華の歓迎会を思い出していた。

新人歓迎会は、親会社のネイティブを交えて開催される。

社長の三島はともかく、専務の根岸は粗野を絵に描いたような人物で、酒が入るとその粗暴ぶりに拍車がかかるような男だった。

新人の蓮華は女性だったこともあり、根岸の隣を強要され、何杯もの酒を飲まされた。

もとより酒が強くないうえにセクハラへのトラウマがあつた蓮華は、たちまち酔ってしまったが、根岸はそれでも尚蓮華に絡んでくる。

それを見兼ねた加賀美は、根岸の近くに進み出た。

『専務、ちょっと飲み過ぎではありませんか？』

『んだあ？ テメエは』

『営業部の加賀美新です。彼女はうちの新人です。初日からあまりかわいがりすぎるのもどうかと…』

加賀美の物言いに根岸は不快感を露にした。

『つまり、おまえは専務のわしに意見するというのか？』

『いえ、決してそんな…』

『おまえ、この娘に惚れてるのか？ 色男だのう』

言いながら根岸はなみなみと大ジョッキにウイスキーをストレートで注いでいく。

『わしのおごりだ。飲め。一気だな』

根岸は意地悪そうな顔で笑った。

加賀美は退かなかった。

相手が誰であれ、こんな酒の飲み方は許せない。もとより加賀美はこの根岸という男が嫌いだった。

そして加賀美は、このウイスキーを飲み干したのである。

それから後のことはよく覚えていないが、加賀美は蓮華を連れて店を出た。

蓮華は既に泥酔だったが、なんとか家まで送り届け、自分はタクシーで帰宅した。

「あたし、すごく嬉しかったです。庇ってくれたの、せんぱいだけだったし」

蓮華が笑顔で加賀美に語りかける。

「あたし、前の会社セクハラで辞めたんです。だから、ここもそうなのかなって思ってたなら、せんぱいが助けてくれて」

「そんな大したことじゃないよ」

加賀美は恥ずかしくなってきた。

泥酔状態だった蓮華がそんなことを覚えているとは思わなかったからだ。

「あたし、あの日からずっと、せんぱいのこと…」 「危ない！」

車が蓮華をかすめて通り過ぎる。

加賀美は蓮華の手をひいて車から蓮華をかばった。

「ちゃんと前見て歩けよ」

「は、はい。ごめんなさい」

言いながら蓮華は、加賀美の手のぬくもりを感じていた。

それに気付いた加賀美は慌てて手を離す。蓮華も頬を赤くして加賀美から離れた。

「こ、ここでいいです。ありがとうございました」

蓮華は頭を下げた。

「まさか戻ったりしないですね？」

「ああ」

「あたしが手伝う件、考えておいてくださいね」

「…ああ」

加賀美は手を振って蓮華に背を向けた。

「せんぱい！」

蓮華が声をかける。

「送ってくれて、ありがとうございました。おやすみなさい！」

「ああ、おやすみ」

加賀美は駅へと向かった。

蓮華はさつき、何を言おうとしたのか。

気になった加賀美の携帯に追い討ちをかけるように、蓮華からメールが届いた。

『今日はありがとうございました。とっても嬉しかったです。気をつけて帰ってくださいね』

なんだ？この展開は…。

加賀美は奇妙な違和感を覚えていた。

メールを打ち終えた蓮華は、さつきまでの加賀美との時間を思い返していた。

『あたし、あの日からずっと、せんぱいのこと…』

もし車がこなければ、どうなっていただろう？

蓮華は確信したことがあった。そのことを、彼女は一人の部屋で口に出していた。

「加賀美せんぱい、あなたが好きです…」

第10話（前書き）

（前回まで）

新しいソフトのマニュアル作りをすることになった加賀美新は、憧れの岬佑月の激励もあって俄然やる気を燃やします。

仕事を手伝いたい後輩の高鳥蓮華をなだめようと家まで送ることにした加賀美は、蓮華と初めて出会った歓迎会の日を思い出します。そして、帰宅した蓮華は自宅で加賀美への想いを確信するのです。

第10話

週が変わって月曜日、加賀美は体の異変に気付いた。咳・喉の痛み・軽い頭痛・それに加えて体がだるい。

「風邪か…」

加賀美はゆっくりとした動作で会社へ行く準備をしながら金曜日のことを思い返していた。

『あたし、あの日からずっと、せんぱいのこと…』

あの日からずっとおれのことをどう思ってきたのか。

蓮華は天道を慕っている。

ならば、自分に対して感じていることは感謝ぐらいなもんだろう。そう考えようとしたが、金曜日の蓮華の態度は明らかにおかしかった。

まるで…自分に対して好意を抱いているかのような仕草だった。

加賀美は携帯を見た。

『送ってくれてありがとうございました。』

とても嬉しかったです』

このメールにも返信はしていない。

なぜ、「嬉しかった」という文言がここにあるのか？

だが、加賀美は考えるのをやめた。

「あいつは、手伝いたいから、おれを持ち上げてるだけだ、きっと」

自分に言い聞かせ、風邪の体に対して気合を入れた。

会社では既に蓮華が来ていた。

いつもは髪を束ねているのに、今日は髪をおろしている。

「おはよう」

蓮華に挨拶して、イスに座る。

「おまえ、髪長かったんだな。いつも束ねてるからわからなかったけど、なかなか似合ってるぞ」

蓮華は顔を真っ赤にして

「や、やだせんぱい、何言うんですか、いきなり…」
と顔を伏せてしまった。

しまった、セクハラだったか、と加賀美は後悔して、そのままマシンを立ち上げた。

「ごほ、ごほ」

始業から加賀美は時折咳こんでいた。

周囲に気を遣って、できるだけ控え目に咳をしていたつもりだったが、それでも近くにいた蓮華には聞こえてしまう。

「…せんぱい、大丈夫ですか？」

心配そうに蓮華が聞いてきた。

やっぱりきたか、と加賀美は思いながら、

「ああ」
とだけ答えた。

「よく見たら顔色もよくないし、本当に大丈夫なんですか？」
蓮華はますます心配になっているようだ。

「ただの風邪だつて。大丈夫だよ」

「…そんな。無理しないでくださいね」

加賀美は蓮華がこちらの様子を気にしている空気を感じていた。

「高鳥さんの言う通りよ加賀美くん、無理はよくないわ」
岬がやってきた。

「はっ…！大丈夫ですよ、岬さん！」

加賀美は例によって立ち上がり、気をつけの姿勢をとった。

「これぐらいの風邪でへこたれてたら、社会人やつてられませんよ。
大丈夫です、はは」

加賀美は大仰に笑ってみせた。

岬は安心したのか、ふっと笑って

「でも、無理しちゃだめよ。つらいと思ったら休むことも大切だから」
と言って去っていった。

「は、ありがとうございます！」

加賀美は最敬礼し、イスに座った。

ふと見ると、正面の蓮華の雰囲気が変わっている。

「…ふん！」

「な、何怒ってんだよ」

「怒ってないです」

明らかに不機嫌そうに蓮華が答えた。

「岬部長に声かけられたぐらいでニヤニヤして…」

「なんだよそれ。体調悪いんだから意味不明なこと言っなよな」

「意味わかんないのは、せんぱいのほうでしょ」
それきり、蓮華は口を閉ざした。

だが、マニュアル作りを切り出さないという意味では加賀美にとって好都合だ。

加賀美は通常業務の合間にマニュアル作りを進めることにした。

この体調では残業は無理だからだが、仮に残業をするにしても、また蓮華をなだめないといけない。

まさか毎日蓮華を送って帰るわけにもいくまい。

昼休みになって、天道がやってきた。

「やってるな」

「あ、天道さん！あの、あたしも手伝うことになりましたから」
だしぬけに蓮華が言う。

加賀美と天道が目を丸くした。
天道はすぐに加賀美を見る。

「せんばいあぶなつかしくて、見てらんなくって」

あくまで明るく蓮華は言う。

天道は「なぜ？」という目線を向けたが、加賀美の体調が優れないことに気付くとそのことを声には出さなかった。

「風邪か？」

「ああ。ちよつとな」

「…わかった。…高鳥さん、手伝ってくれるのはありがたい。加賀美を助けてやってくれ。加賀美、この話をするのは高鳥さんまでにしとけ。いいな」

天道の目は笑っていない。

加賀美が黙って頷くと、天道は話題を変えた。

「明日の昼、空けといってくれ。いっしょに弁当を食べよう」

意外な申し出だった。

加賀美は蓮華の反応を見たが、前のように「あたしも」とは言わなかった。

「わかった。おれも相談したいことがあったんだ」

「じゃ、明日の昼な」

そう言って天道は出て行った。

第11話（前書き）

（前回まで）

新しいソフトのマニュアル作りをすることになった加賀美新は、憧れの岬佑月の激励もあって、残業しながら作業を進めます。

後輩の高鳥蓮華は、手伝いたい意思を伝えますが加賀美はそれをなだめるために蓮華を家まで送ることにしました。

加賀美は翌日、風邪をひいてしまいます。

加賀美が好きだということを確信した蓮華は、加賀美を心配しますが、岬に声をかけられて喜ぶ加賀美を見て、やきもちからまたも不機嫌になるのです。

そんな加賀美を同期の天道総司は「明日の昼をいっしょに食べよう」と持ち掛けます。

第11話

「ねえ、せんぱい」

その日の午後、蓮華が身を乗り出してきた。

「天道さんもああ言ってくれたことだし、あたしが手伝わてもいいですよ」

「…」

加賀美は答えられなかった。

天道が事後承諾とはいえ、承諾するとは思わなかった。

「なんでおまえ手伝いたいんだ」

「だって、あたしはせんぱいが心配ですから」

あっけらかんと蓮華は答えた。

「…！？…天道のためじゃないのか」

自分が心配ということは、蓮華が手伝う理由は天道のためではなく、加賀美のためということになる。

「も、もちろん天道さんのためですよ。でもせんぱい風邪ひいてるし、無理してほしくないんです」

「…そうか」

加賀美は蓮華が何を考えているのかわからなくなった。

「とりあえず今日は、残業はしない。風邪治したいからな。…おまえにうつすのも悪いし」

「…あたしがいつしよなの迷惑ですか？」

乗り気にならない加賀美に蓮華はイライラしてきた。

「誰もそんなこと言っていないだろ。また明日から手伝ってもらうから」

「それを聞いて安心しました」

蓮華はほっとした表情を見せた。

「せんぱい、早くよくなってくださいね」

翌日になっても加賀美の体調は思わしくなかったが、それでも加賀美は入社した。

相変わらず蓮華は加賀美を心配していたが、加賀美からソフトのインストールと操作を指示されると、それどころではなくなった。

昼になり、天道が加賀美を迎えに来た。

「じゃ、高鳥さん。加賀美を借りるよ」

天道は蓮華に挨拶して、加賀美も天道に倣って席を立った。

「弁当とは珍しいな、天道。どこの弁当屋だい？」

エレベーターの中で加賀美は天道に話しかける。

「その前に、おまえの相談とやらだが、高鳥さんのことか？」
加賀美は驚いた。

「そうなんだよ、天道。聞いてくれ、最近のあいつ、ちょっとおかしいんだ。おれが家まで送ると『嬉しかった』とかメールくるし、風邪ひいたらひいたで『心配です』だし、岬さんや樹花ちゃんの話をするとか機嫌が悪くなるんだよ」

加賀美は一気に捲し立てた。

天道はニコリともせずに

「やっぱりおまえは鈍感だな」と答えた。

「そんな相談は受けられんな。俺が言えるのは、おまえは高鳥さんをどう思ってた、てことだけだ」

「おれが…高鳥を？」

そういえば加賀美は考えたことがなかった。

エレベータから降りた天道は玄関から外に出た。

それに続いた加賀美の耳に聞き覚えのある声が飛び込んで来た。

「加賀美さん！」

天道の妹の樹花だった。

「樹花ちゃん！？どうしてここに？…天道、これはいつたい…」

「ま、おまえを心配してるのは、高鳥さんだけじゃない、てことだ」

「や、やめてよお兄ちゃん…」

樹花が顔を真っ赤にして俯いた。「加賀美、今日の弁当は樹花の手作りなんだ」

見ると、樹花の手には弁当が乗っている。

「はい、加賀美さん」樹花から弁当を手渡され、加賀美は素直に喜んだ。

「はは、嬉しいな。誰かの手作り弁当なんて、何年ぶりだろう」その様を見た天道は、自分も樹花から弁当を受け取ると、「じゃあな」と言って建物の中へ入っていった。

「ちょ、ちょっと待てよ天道。樹花ちゃんは？」

「樹花はおまえに相談したいことがあるらしい。昼休みだけでも、おまえが相手してやってくれないか？おれは忙しいからな」

「お、おい……」

加賀美の目前では、樹花が顔を赤くして微笑んでいる。

「……じゃ、じゃあ、その公園でも……」

仕方なく加賀美は、樹花を連れて近くの公園へ行くことにした。

その頃、会社に戻った天道は、廊下で蓮華と遭遇していた。

「あれ？天道さん、せんぱいと一緒にじゃなかったんですか？」

天道にしてもここで蓮華と会うのは誤算だったようで、「ああ、いや」とぎこちない返事をするだけだ。

「……？」

蓮華は、天道の手にある弁当を見た。

どう見ても手作りだった。

この状況で、天道に手作りの弁当を持ってくるとすれば、それは樹花とかいう妹しかありえない。

蓮華は、天道の隣をすり抜けて、エレベータへ走った。

まだそうと決まったわけではない。

が、もし樹花が来ていて、そして加賀美に手作りの弁当を渡しているとしたなら、それはもう普通の関係とは言えないのではないのか？

もし、そうなら、あたしは…。

蓮華はエレベータまで着いた。

第12話（前書き）

新しいソフトウェアのマニュアル作りになった加賀美とそんな彼を手伝いたい後輩の高鳥蓮華。

そんな中、蓮華は初めて会った日から加賀美を想っていたことを確信します。

ある日加賀美と同期の天道総司は、加賀美を連れて昼食と一緒に食べようと持ち掛けますが、そこに天道の妹の樹花が現れ、さらに天道は二人を残して姿を消してしまいます。

樹花が来ていることを察知した蓮華は、エレベータへと走るのです。

第12話

「…相談って、何？」

加賀美は公園のベンチで座り、樹花の作った弁当を広げた。

「私、安心した。風邪ひいたって聞いたけど元気そうで」

「あ、ああ…。心配かけたね。天道から聞いたの？」

加賀美は弁当を開けた。

卵焼きに肉類・野菜が彩りよく盛り付けられている。

「いただきます」

加賀美は手を合わせて食べ始めた。

「そういえば、好きな彼とはその後どう？」

「…なかなか難しいな。気付いてくれなくて」

樹花が正面を向いたまま答えた。

「そう…。この卵焼きうまいね。樹花ちゃん本当に料理上手だなあ。きつと、いいお嫁さんになれるよ」

その言葉に樹花が反応する。

「…そしたら、加賀美さん、私をお嫁さんにしてくれる？」

「ははは。樹花ちゃんみたいな子ならいつでもOKさ」

加賀美の答えに樹花は応じない。

「樹花…ちゃん？」

「どうして？どうしてなの？どうしていつも加賀美さんは、そうやって…」

樹花の表情がいつもと違うことにようやく加賀美は気付いた。

エレベータまで来た蓮華は、しかしボタンを押せなかった。

飯に行ったところで何になるというのだろう。

樹花の弁当を食べる加賀美の邪魔をして、それが何になる。

そもそも自分が勝手に加賀美のことを好きなかっただけであって、加賀美が誰を選ぶのかは加賀美が決めることでしかない。

そこまで考えて蓮華は引き返した。

加賀美が好きな相手は、自分ではないだろう。しかし樹花でもない。加賀美は岬佑月が好きなのだ。

そして、自分が好きになった加賀美という男は、そう簡単にはぶれない男だ。

蓮華は、加賀美の帰りを待つことにした。

公園で、樹花は加賀美と向き合っていた。

「私、加賀美さんをずっと見てきた。加賀美さんのことをずっと考えてきた。でも加賀美さんは、お兄ちゃんの妹としてしか、私を見てくれなかった」

「…樹花ちゃん」

樹花は加賀美を見つめて言った。

「私、加賀美さんが好きなの。初めてお兄ちゃんが家に連れてきた日からずっと加賀美さんを見てきたのに、加賀美さんは全然気付かないで…」

加賀美は弁当の味もわからなくなった。

「加賀美さん、私を見て。お兄ちゃんの妹としてじゃなく、一人の女の子として、私を見て」

樹花は立ち上がって加賀美を見つめた。

「加賀美さん、好き」

そう言って樹花は加賀美に抱きついてきた。

加賀美は、しかし答えられなかった。

樹花が自分を好きだということは、まるで気付かなかった。

天道が言っていた鈍感というのは、こういうことだったのか。

樹花の言う「好きな男」とは、自分のことだったのか。

加賀美は、樹花の肩を掴んで、ゆっくりと体を離れた。

「…加賀美…さん？」

樹花が加賀美を見た。

「樹花ちゃん、ありがとう…。こんなおれを好きだと言ってくれて」

樹花は加賀美の目を見つめたままだ。

「でも、ごめん…。今すぐに答えられないよ。でも、樹花ちゃんを一人の女の子として、ちゃんと見るよ」

「本当に？」

樹花の目が潤みかけている。

「ああ。だから、もう少し、待ってくれないか？」

「……」

樹花との間に沈黙が続いた。

「…わかった」

しばらくの沈黙のあと、樹花が口を開いた。

「でも、一つだけ教えて。…高鳥さん、て誰？」

加賀美の胸が痛んだ。

「高鳥…？」

「さっきお兄ちゃん言った。おまえの心配をしてるのは、高鳥さんだけじゃないって。つまり、私の他に加賀美さんを心配してる高鳥さんって人がいるってことよね？」

「あ、ああ…」

あんなわずかな言葉も聞き漏らさないとは…。

「高鳥さんって誰？高鳥さんも、加賀美さんのこと好きなんじゃないの？」

加賀美は意を決した。

「高鳥は、おれの後輩だ。でも樹花ちゃんが気にするほどのことはないよ。おれが休んだら、仕事が増えるのを気にしてるだけさ」

加賀美は努めて明るく言った。

「だったらいいけど…。高鳥さんって女の人？」

「うん」

「…やだな」

樹花が呟いた。

「え？」

「ごめん、ちょっとやきもち。好きな人が私以外の誰かに心配されてるのって…何か、嫌なの」

「…」

加賀美は黙っているしかなかった。

「じゃ、私そろそろ行くね。加賀美さんも昼休み終わる頃でしょ？」

「あ、ああ……」

加賀美は内心ほっとしていた。

樹花のまつすぐな気持ちを今すぐ受け止められない以上は、逃げるしかないからだ。

「加賀美さん、さっきの話、忘れないでね。私をちゃんと見る、て話」

「ああ」

「私、本気よ。じゃあね」

樹花は加賀美から弁当を受け取ると、去っていった。

加賀美はしばらくベンチに座ったまま考えた。

『高鳥さんも加賀美さんのこと好きなんじゃないの？』

『おまえは高鳥さんをどう思ってるんだ』

加賀美の胸中に天道兄妹から投げ掛けられた言葉が爆ぜる。

加賀美は考えた。

答えは見つからなかった。

第13話（前書き）

（前回まで）

天道総司から頼まれて新しいソフトのマニュアル作りをする事になった加賀美新と後輩の高鳥蓮華。

そんなある日、天道の妹の樹花が手作りの弁当を持って加賀美の前に現れます。

そして、樹花は自らの想いを加賀美に伝えるのです。

第13話

加賀美がフロアに戻った時には13時ギリギリだった。

「遅かったですね」

蓮華があきれながら待っていた。

「ああ…」

気のない返事をする加賀美が、蓮華は気になった。

樹花との間に何かあったのかもしれない。

「せんぱい…」高鳥、マニュアル作りだけど、今日時間あるか？」
加賀美の言葉に蓮華の表情が晴れた。

「は、はい！」

「悪いけど、手伝ってくれ。帰り遅くなるかもしれないけど」
「そしたら、またせんぱい送ってくれます？」

くすくすと蓮華は笑いながら言った。

「…そういう話をおれにして、おまえはこれからどうするつもりだ」

加賀美の声がいつもと違う。

蓮華は失言だったと落胆すると共に、樹花との間に確実に何かあったことを確信した。

加賀美は蓮華に資料を渡した。

ここまでできたマニュアルと、マニュアル作りのコンセプトだ。

「18時までに目を通しておいでくれ」

いつにない仕事モードの加賀美に蓮華は「はい」と言うしかなかった。

18時を過ぎて、社員たちが帰路につくなか、加賀美と蓮華は作業を続けた。

「高鳥…」

19時を過ぎた頃、フロアに誰もいなくなったことを確認してから、加賀美が口を開いた。

「おまえ、おれが…心配か？」

「…え？」

蓮華は、質問の意図がわからなかった。

「風邪をひいたおれが…心配か？」

「そんなの当たり前じゃないですか」

蓮華は加賀美を見た。

「今日は、もう帰れ。おれと一緒にいると風邪うつるぞ」

「イヤです」

蓮華は即答した。

「もう時間ないんですよ。それに、風邪ひいてるせんぱいを一人残して帰れません」

「高鳥…」

「あたしにせんぱいの心配されるの、迷惑かもしれないけど、だつて本当に心配なんですもの…」

蓮華はいつものように加賀美を直視して言った。

「どっちにしても、今日は送ってやれないぞ」

「構わないです。あたしだって、せんぱいに送ってほしくてやるわけじゃないし。今日はあたしがせんぱいを送りたいぐらいです」

「…ふっ…あははは」

不意に加賀美は笑い出した。

「おまえ、面白い奴だつたんだな」

「じょ…冗談のつもりなんかないです、あたしはほんとに…」
「わかった。そんなときは、まあ頼むよ。作業を続けよう」

加賀美の雰囲気が少し変わった。

そんな加賀美に、蓮華も作業を続けるのだった。

結局、蓮華は加賀美を送らなかった。

蓮華本人は送れたかったのだが、加賀美が固辞したからだ。

体調の悪い加賀美にこれ以上わがままも言えない。

蓮華は素直に従った。

その翌日の水曜日遅く、ついにマニュアルが完成した。
ネイティブの経営会議は金曜日。

なんとか間に合った。

「できましたね、せんぱい」

「ああ。できた。…高鳥、ありがとうな。おまえが手伝ってくれなきゃ、完成しなかった」

いつになく真剣な目線の加賀美に、蓮華はドギマギした。

「な、何言っちゃってるんですかあ…。だ、だから早いうちからあたしに手伝わせときゃよかったんですよ」

「…ああ、そうかもな」

否定しない加賀美に、蓮華はまたもドキツとした。

いつもと違う…。

「せ、せんぱい…?」「ああ、帰ろう。今日は送って帰ってやる。もう体もイイ感じだからな」

しかし蓮華は答えた。

「ダメですよ。無理しないでください。それに、前に送ってもらった時に風邪ひいてるんですもの、また悪くなったら大変だわ」

「いや、今日はもう遅いし」

蓮華はくすくすと笑った。

「せんぱい、あたしのこと心配してくれるんだ」

「まあな」

やはりいつもの加賀美ではない。

「たまには、おれにもおまえの心配ぐらいさせろ」

蓮華は胸の高鳴りを抑えられなかった。

『な、何？今日のせんばい…』

「とりあえず、出ようか。せめて駅まで送るよ」

「は、はい」

蓮華は加賀美に従って外に出た。

第14話（前書き）

（前回まで）

新しいソフトのマニュアル作りになった加賀美新と後輩の高鳥蓮華。

そんなある日、天道の妹の樹花が手作りの弁当を持って加賀美の前に現れます。

樹花に自分の想いを伝えられた加賀美は、しかし答えを保留します。

当面の課題として、マニュアル作りに取り組む加賀美とそれを補助する蓮華の働きでマニュアルは完成し、加賀美は蓮華を家まで送って帰ることを提案します。

第14話

加賀美は、降りる駅に着いても降りようとしなかった。

「せんぱい…？ま、まさか」

「おまえを家まで送るよ」

加賀美は答えた。

「そ、そんな。あたしは大丈夫ですよ」

言いながら蓮華は嬉しかった。

加賀美と、まだしばらくいつしよにいられると思うだけで、胸が弾んだ。

「おまえには感謝してるんだ。今日は送らせてくれ」

真顔で言う加賀美に蓮華はドキドキした。

「わ、わかりました。せんぱいがそこまで言うなら、送らせてあげますよ」

「高鳥、おまえ顔赤いぞ？熱でもあるんじゃないのか」
加賀美が駅で蓮華に言った。

蓮華自身も、少し熱っぽいとは思っていたが、それは加賀美がいるからだ。

「もしかして、おれの風邪が…？」

「だ、大丈夫ですって。か、帰りますよ」

蓮華は加賀美を先導して歩き始めた。

「ねえ、せんぱい…」「ん？」

「天道さんの妹と…何かあつたんですか？」

加賀美は愕然とした。

「なぜ…そんなふうに思う？」

平静を装って加賀美が聞いた。

「昨日、来てたんでしょ？」

加賀美は隠せない、と判断した。

「ああ、来たよ。でもなぜそれを？」

「あたし、あの後天道さんに会ったの。せんぱいとお昼食べてるはずなのに、弁当だけ持って帰ってくるんだから、すぐにわかったわ。樹花って妹が来てるってね」

蓮華は加賀美に振り向きながら言った。

「そうか…」

「何があつたの？」

蓮華は思い切って聞いてみた。

「…高鳥、ごめん。今はまだ言えない。いつか、言えるようになってから話すよ」

予想通りといえば、予想通りの答えだった。

「…わかりました。それまで、待ちます。あたしも、せんぱいに言いたいことがあったんですが、言える時がきたら言います」
「…そうか」

蓮華の家の前に着いた。

「今日はありがとうございました。気をつけて、帰ってください」
「ああ」

加賀美は蓮華と手を振って別れた。
そんな加賀美を、蓮華は見送ってから中に入った。

帰りの車中、加賀美は考えていた。

『私をちゃんと見て。一人の女の子として』

昨日樹花に言われたことが、皮肉にも高鳥蓮華のことを見つめなおす契機になった。

というよりも、樹花を一人の女として見ようとすると、どうしても蓮華を思い浮かべてしまう。

岬ではなく、蓮華を。

蓮華に対して、自分はどんな感情を抱いているのか。

蓮華には、岬のような聡明さも樹花のような瑞々しさもない。

しかし、それならなぜ自分は今日蓮華を送って帰ったりしたのか。
手伝ってもらったからか？

違う。

蓮華と、もう少し一緒にいたかったからではないのか。

加賀美はこの自分の結論に汗をした。

『おれは…おれは高鳥のことが…?』

だが、仮にそうだとし、決着をつけなければならない問題がある。

自分を好きだと言った樹花に対しては、少なくともその気持ちに応えることはできない。

そして、その兄である天道。

天道は、樹花の気持ちを知っていたのだろう。

あれから天道とは会っていないが、樹花と自分を二人にする機会を作ったのは天道だった。

今にして思えば、あの日自宅へ招いて樹花の料理を食べさせたのも、樹花の気持ちに気付けようという天道の思いがあったのかもしれない。

そんな妹の意中の男が、違う女の相談をすれば、それは答えられないだろう。

それでもなお返した「おまえはどう考えているのか」という答えは天道なりの精一杯の回答だったに違いない。

加賀美は、自分の気持ちを整理する時がきたことを確信していた。

第15話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーの営業マンである加賀美新は、同期の天道総司より新しいソフトのマニュアル作りを依頼されます。

憧れの岬佑月発案と知った加賀美は、張り切ってマニュアル作りに励み、そんな加賀美を慕う後輩の高鳥蓮華もマニュアル作りを補助するのでした。

そんなある日、天道の妹の樹花が手作り弁当とともに加賀美の前に現れます。

樹花は自らの想いを加賀美に打ち明けますが、それが契機となって加賀美は自分の気持ちと向き合うようになります。

加賀美と蓮華の働きでついにマニュアルは完成、加賀美は蓮華を家まで送っていく道中で、蓮華を意識しつつある自分に気付くのでした。

第15話

翌日の木曜日、加賀美は完成したマニュアルを岬に提出した。

「ありがとう加賀美くん。また見せてもらっわ。ご苦労様」

「はい」

加賀美は礼をして岬から離れた。

いつものように最敬礼はしない加賀美にちょっとした違和感を覚えながら、岬は加賀美に声をかけた。

「加賀美くん、お昼休み時間あるかな？ いっしょに食べない？」

唐突な岬の提案に加賀美は戸惑った。

「え、ええ。大丈夫です」

加賀美の答えに岬は満足そうに頷いた。

「よかったですね、せんぱい。岬部長とお昼なんて」

蓮華がむくれて言った。

理由はどうあれ、岬と加賀美が昼をともにするのはやはり気分が悪い。

「…ああ」

だが加賀美は浮かない表情だった。

「そんなことより、高鳥おまえ顔色悪いぞ。まさか本当におれの風邪うつったんじゃないだろうな」

蓮華は不思議に思った。なぜか加賀美はあまり乗り気ではなさそう
だ。

それどころか、蓮華の体調まで気遣ってくれているように見える。
確かに蓮華は少し頭が重かったが、そのことを心配してくれる加賀
美が嬉しかった。

「大丈夫ですよ。毎日ちゃんとうがいしてますから」

「…。そうか、まあ、気をつけるんだぞ」

「うふふ…」

蓮華はおかしくなった。

「なんだよ？」

「だって、せんぱい昨日からあたしの心配ばかりするんですもの。
なんだか気持ち悪い」

加賀美は表情を変えなかった。

「…そうだな、気持ち悪いよな。…でも、これがおれなんだ」

「…でも、うれしい」「え？」

「い、いえ、なんでもありません。そんなことより、何の話なんです
しようね？ 岬部長。まさか愛の告白だったりして」

加賀美はそれには答えず、黙々と仕事に入った。

蓮華はバツの悪そうな顔で仕事をするしかなかった。

昼になった。

加賀美は、岬に伴われて近所の定食屋に入った。

「後から天道くんも来るから」

天道……？加賀美は怪訝そうに岬を見る。

「マニュアル完成のお祝い、てわけじゃないんだけど、このソフトも一段落したことだし、加賀美くんとかこういう席を設けたくって」

「…そう、ですか」

そこへ天道が入ってきた。

「すみません遅くなりまして」

「いえ、今来たところよ」

岬は給仕に料理を注文した。

よく来ているのか、手慣れた注文だ。

加賀美はとりあえず、唐揚げ定食を頼むことにした。

料理が運ばれてきて、箸をつけながら加賀美は口を開いた。

「岬さん、このマニュアルはおれだけの力じゃできなかったんです。もし、ソフト一段落というなら…」

「知ってるわ。高鳥さんでしょ？確かに、加賀美くんの言うとおり高鳥さんがいなければ完成しなかったかもしれないわね」

「だったら…」

加賀美を制して、岬は言った。

「確かにソフト開発が一段落したという話はしたけど、今日話したことはそれだけじゃないの。…私と、天道くんのことよ」

岬の言葉に加賀美はますます訝しげに表情を曇らせた。

なぜいつも、蓮華を外して考えるのだろう？

だが、岬の次の発言に、加賀美は文字通り言葉を失った。

「私たち、結婚するの」

「……！？」

加賀美は息をのんだ。

岬の隣に座る天道は、黙して語らず、岬は加賀美の反応を伺っている。

第16話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーの営業マンである加賀美新は、同期の天道総司から頼まれて新しいソフトのマニュアル作りをすることになります。

憧れの岬佑月の激励や彼を慕う後輩の高鳥蓮華に手伝ってもらいながら、マニュアル作りを進めていたある日、加賀美は天道の妹の樹花から告白されます。

それを契機に加賀美は自分の気持ちと向き合うようになります。

様々な想いを孕みながらマニュアルはついに完成しますが、そんな折、加賀美は岬から実は天道と付き合っていて、しかも結婚する意思があることを伝えられるのでした。

第16話

「…けっ…こん…ですか」

加賀美は搾り出すように言った。

「そう。加賀美くんには言ってなかったけど、私たち付き合ってたの」

加賀美は衝撃を受けた。

岬が天道と付き合っていたという事実もそうだが、その事実が思ったよりショックと受け止めていない自分に衝撃を受けたのである。

「…そ、そうでしたか…。全然知りませんでした」

「すまなかったな、加賀美…」

天道がようやく口を開いた。

「いや…。確かに、こんな話、高鳥にできないよな。あいつ、おまえのこと好きだし」

「…おまえ本気で言ってるのか？」

天道があきれながら言った。

岬はそれを手で窘めながら、

「高鳥さんには、加賀美くんから伝えておいて。どちらにしても高鳥さんには衝撃的な話でしょうから」

「…わかりました」

岬は笑みを浮かべると、加賀美に茶を注ぎながら言った。

「でね、私たちの式に出席してほしいの。これは、天道くんが望んだことよ」

加賀美は天道を見た。

「…そうですか…。わかりました。…天道、おめでとう。岬さん、おめでとうございます」

「ありがとう、加賀美くん」

それから後のことは、式の日取りや二人の馴れ初めなどの話になったが、加賀美はほとんど聞かずに唐揚げを食べた。

「じゃ、おれはこれで…。…天道…、今晚、時間を取ってくれ。おまえの家に行きたい」

唐突な加賀美の願いだったが、天道はその表情から気持ちを察して岬に許可をとった。

「いいわ。加賀美くんとお話しなさい」

「ありがとう」

たかだかこんなことでも許可をとる天道に、加賀美は軽い苛立ちを覚えた。

しかし、不思議と岬を取られたという感情ではなく、冷やかに近い苛立ちであることに加賀美はまたも驚いた。

「…じゃ、また後で」

加賀美はそのまま出て行った。

時計を見ると12時40分。まだ昼休みは残っている。

加賀美は急いでオフィスに戻った。

「あれ、せんぱい。早かったですね？」

オフィスでは蓮華が自分の席にいた。

彼女は、いつも弁当を持参しているためオフィスで昼食を摂っている。

「…高鳥…」

加賀美はそのとき、自分が泣いていることに気付いた。

「せんぱい…？どうしたんですか？」

蓮華が慌てて駆け寄ってきた。

「い、いや…なんでもないよ。驚かせて、すまない」

加賀美は慌てて涙を拭いた。

しかし蓮華は収まらない。

「なんでもあるでしょ。何があつたんですか？」

「はは…大丈夫だって。本当になんでもないんだ」

加賀美は笑ってごまかす。

蓮華もそれ以上は追及できなかった。

「…せんぱい、あたしでよかったら、いつでも話相手になりますから…」

そんな蓮華の申し出が加賀美にはありがたかった。

「高鳥、実はな、岬さんと天道、結婚するんだ」
何の脈絡もなく加賀美が言った。

「…え？」

蓮華の目が点になった。

「まさか」

「本当さ。さつき二人から聞いた。おれに式に出て欲しいってね。
フフ…天道のやつが、岬さん発案のソフトを作ってる、てのも今から思えば自然な話だよな」

自虐的に加賀美は笑った。

「おまえもショックだろうが…、まあ、そんなことがあってだな」
「そう、ですか…」

実は蓮華はさほどショックでもなかった。

むしろ、これで岬が退場となれば、ライバルは樹花だけとなることを考えていた。

「ま、まあ、そうですね…。でも、あたしは天道さんの幸せを願うことにします」

加賀美に対してのポーズとして、蓮華はショックなふりをした。

「そうか…。実はな、おれ、あまりショックでもなかったんだ。でも、岬さんが結婚となると、やっぱり嬉しいやら寂しいやらでね…」
加賀美の言葉に蓮華は少し驚いた。

『あまりショックでもなかった…？なぜ？せんぱいは、岬部長が好きだったはずなのに？』

蓮華の読みはそのまま加賀美の違和感につながっていた。

それまでずっと、加賀美は自分が岬に惹かれていると思っていた。だが、本当は岬に対して感じていたのは恋愛感情ではなかったのだ。

「高鳥、週末…空いてるか？」

加賀美は言った。

「な、なんですか？失恋パーティーでもするんですか？」

蓮華は不意を突かれて戸惑いながら答えた。

「おれの話相手になつてくれるんじゃないかなかったのか」

「そ、それはなりますけど、いくらなんでも突然すぎでしょ」

蓮華の体温が上昇した。

「空いてないのか？」「あ、空いてますよ。週末デートするカレシもいませんから」

蓮華は顔を真っ赤にして答えた。

週末に加賀美と会うのは初めてだった。

プライベートでも加賀美と会える…その事実を想像しただけで蓮華はワクワクしていた。

「そうか。じゃ、１１時におまえの家に行くから。いっしょに昼ご飯でも食べよう」

「あ、あたしの家ですか？」

「だめか」

「し、仕方ないですね。せんぱいが行きたいと言ったんですからね…。変なことしないでくださいね」

この返答は加賀美も意外だった。

『断らない…？自分の家なのにか…？彼氏でもない男を…？』

加賀美にとつては、この問いは半ば賭けだった。

どちらにしても蓮華とは会いたかったし、樹花を含め全ての決着を週末でつけるつもりだった。

だが、蓮華の家がOKとなると…、
もっとも、そんな深い意味はないのかもしれない。

加賀美は、蓮華に気取られないように平静を装って答えた。

「誰がおまえなんか」

第17話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーの営業マンである加賀美新は、同期の天道総司から新しいソフトのマニュアル作りを依頼されます。

憧れの岬佑月の激励や、彼を慕う後輩の高鳥蓮華の補佐もあって、マニュアル作りを進める加賀美ですが、そんな彼に想いを寄せる天道の妹・樹花はその気持ちを加賀美に伝えるのでした。

それが契機となって、加賀美は自分の気持ちと向き合うようになります。

折しもマニュアルは完成しますが、加賀美は岬から天道と結婚することを告げられます。

意外にもショックをあまり感じなかった加賀美は、その日の夜、天道の家を訪ねるのでした。

第17話

その日、加賀美は実に久しぶりに定時であがった。

蓮華が不思議そうに見ていたので天道の家に行くと伝えておいた。そして、天道と待ち合わせをして、二人で天道の家に来てきた。「いらっしやい、加賀美さん。おかえり、お兄ちゃん」いつものように樹花が出迎えてくれた。

「こんばんは、樹花ちゃん」

「ただいま」

着くやいなや、加賀美は天道に

「すまないが、樹花ちゃんと二人にしてくれ。おまえとは後で話がある」

「…わかった」

天道は奥の部屋へと入っていった。

「さて…」

加賀美は樹花を見た。

加賀美に見つめられ、樹花は顔を赤くしている。

「この前の話だけ…」

樹花が唾を飲み込むのがわかった。

「おれ…ごめん。樹花ちゃんの気持ちは嬉しいけど…。おれは、樹花ちゃんと付き合えないよ」

樹花の表情が変わっていく。

「…どうして？」

「おれ…わかったんだ。誰を好きなのか…。でもそれは、樹花ちゃんじゃないんだ」

加賀美は懸命に声を出した。

「…なるほどね。それは、あの高鳥さんって人…？」

「……」

「…そうなんだ。…嘘つき。私が気にするような関係じゃないとか言いつつ、思い切りライバルだったんじゃないの」

樹花は泣いていた。

加賀美は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

が、どんな言い訳をしても樹花の気持ちに伝えられない以上、加賀美は俯くしかできない。

「……わかったわ。でも私、諦めないから。加賀美さんをずっと見てきたのに、こんなことで諦めないから…。…お兄ちゃん、呼んでいい？」

樹花の答えは意外だったが、もとよりすんなりいくとも思っていない。

加賀美は首を縦に振った。

ほどなく、天道がやってきた。

「お兄ちゃん、結婚式に高鳥さん呼んで」

「!？」

樹花の提案に加賀美は驚いた。

「高鳥さんもマニュアル作りに関係したんでしょう？ 岬さんの部下なんだったら呼んであげて」

「樹花ちゃん、何を…」

樹花は加賀美に向き直った。

「私は諦めない。せめて…せめて、高鳥さんって人がどんな人か知りたいの。だって、加賀美さんが好きになった人なんだもの」

天道もそれに呼応した。

「いいだろう。高鳥さんも呼ぶよ。だが、樹花…いいんだな？ おまえにとつて、ツライ決断かもしれないぞ」

「構わないわ。私は確認したいだけだから…。私の話は終わり。あとはお兄ちゃんたちの話をして」

それだけ言うと、樹花は部屋へ消えていった。

加賀美と二人になった天道は、とりあえずイスを勧めた。

「…知ってたのか」

加賀美が切り出した。

「何を？」

「とぼけるな。樹花ちゃんの気持ちだよ」

天道は息を吐いた。

「当たり前だろ。俺たちは兄妹なんだし、むしろ、おまえだって気付いてると思ってた」

「天道、おれは別に責めてるわけじゃあない。おまえの言う通り、鈍感なおれが悪いんだ」

天道はふつと笑いながら聞いた。

「…おまえ、高鳥さんのことが好きだろ？」

一呼吸おいて、加賀美は答えた。

「…ああ」

「そうか…」

「おれはニブイ男だ。だが、おまえや樹花ちゃんのおかげで、そのことに気付いた。…樹花ちゃんには申し訳ないが」

「全くだ」

天道は笑いながら答えた。

「だが、おれはわかっていたさ。おまえが高鳥さんを大切に思ってる、てな。高鳥さんを最初に外したのも、それを確認するためだ」
「…何のためにそんな確認を？」

「樹花のためだ。樹花にとって、見込みがあるかどうかを知りたかった。おまえが高鳥さんを好きなことに気付けばそれもよし、気付かなければ樹花にも勝ち目があると思った」

加賀美は複雑な心境だった。

「おまえ…」

「俺のやってることはひどいことかもしれん。だが、俺はおまえも樹花も大切だったんだ」

天道の言葉を聞きながら、加賀美は、この男になら岬も釣り合えると思った。

「…岬さん、いい女だろ？」

「…ああ。…加賀美、改めて言う。高鳥さんと式に来てくれ。樹花のことは気にするな。…ただ区切りをつけたいだけなんだ」

「…わかった。…なあ、天道…、高鳥はおまえのことが好きだって言ってた。おまえの結婚式は、それこそツライかもしれない」

天道はまた笑いながら言う。

「おまえそれ本気で言ってるのか？…だとしたら、相変わらず、二
　　ブイ奴だ…」

加賀美は、答えられないまま、天道の家を後にした。

樹花は見送りには来なかった。

第18話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーの営業マンである加賀美新は、同期の天道総司から新しいソフトのマニュアル作りを依頼されます。

後輩の高鳥蓮華の補佐もあって、無事に完成させた加賀美ですが、天道の妹の樹花から想いを告げられ、加賀美本人もまた、蓮華への想いに気付きます。

が、その事実にも樹花は加賀美を諦めないという気持ちを固めるのでした。

第18話

翌日、加賀美はいつものように出勤した。

今日はネイティブの経営会議の日だ。

加賀美が嫌いな根岸専務がやってくる日でもある。

「おはようございます」

蓮華が出勤してきた。

が、その顔色は明らかに悪い。

加賀美は心配になってきた。

「お、おまえ大丈夫なのか？」

「あはは…大丈夫ですよ…。せんぱいは心配症ですね…」
力なく笑いながら、蓮華は席についた。

始業してまもなく、岬がやってきた。

「加賀美くん、マニュアルありがとうね。これならきつと通るわ」
加賀美は立ち上がり、岬に礼をした。

「ありがとうございます。でも、高鳥がいなかったら完成はしませんでした」

「いつも言ってることね」

笑みを浮かべて岬は蓮華を見た。

蓮華も立ち上がって岬に応えようとした、その時だった。

「あ……」

そのまま、蓮華は足下からくずおれた。

慌てて加賀美が蓮華に駆け寄る。

「おい、高鳥！」

加賀美の呼び掛けに蓮華はうつすらと目を開けた。

「大丈夫です…。これくらい…。ちょっと目まいがただけですから…」

と、立ち上がろうとして再び蓮華は倒れた。

「おい！」

気になった加賀美が蓮華の額に手を当てる。

「ひどい熱じゃないか。やっぱりおれの風邪が」

蓮華はなんとか立ち上がって、加賀美に弱々しく笑った。

「大騒ぎしないで…。ください。あたしは…。大丈夫ですから…」

それきり、蓮華はまた気を失って倒れてしまった。

「加賀美くん、高鳥さんを連れて病院に行きなさい。場合によっては直帰してもいいから」

成り行きを見ていた岬が加賀美に言った。

「し、しかし…」

「高鳥さんについててあげなさい。いいわね」

岬の指示にはいつにない気迫があった。

加賀美は大きく頷くと、蓮華をおんぶしてオフィスを出て行った。

病院に向かうまでの道中で蓮華は目を覚ました。

「う…ん…」

「気がついたかい？今病院に連れてってやるからな」

加賀美におんぶされてると気付いた蓮華は慌てて体を揺すった。

「だ、大丈夫ですよ。ほんとに大丈夫です…一人で歩けますから…」

あまりの抵抗に加賀美は降ろすことにした。

「せんぱい…お仕事は？」

「今日は休みだ」

「そう…ですか…」

数歩進んだだけで、またも蓮華の体がふらついた。

慌てて加賀美が蓮華を支える。

「すいません…」

ふらふらになりながら、ほうほうのていで加賀美は蓮華を病院へ連れてきた。

診察の結果は、やはり風邪だった。

解熱剤を注射してもらい、抗生物質を処方されて二人は病院を出た。

病院を出た加賀美は、タクシーを呼ぶことにした。

「ここからは一人で大丈夫ですよ、ありがとうございます…」

タクシーが来ればなんとか一人で帰れると蓮華は言ったが、加賀美は許さなかった。

「だめだよ。また倒れたらどうするんだ」

「大丈夫ですよ…」

言いながら蓮華は意識が朦朧としている。

果たしてタクシーが来た時には、加賀美も蓮華と一緒に乗り込んだ。

蓮華の家に着く頃には、蓮華は再び気を失って加賀美の肩にもたれかかっていた。

「2590円です」

高い出費にはなったが、加賀美はカネを払って蓮華と外へ出た。

「おい、高鳥…部屋どこだ。あと、カギ」

歩けない蓮華を背負って、加賀美は蓮華からカギを受け取った。

なんとか蓮華の部屋までたどり着き、加賀美は部屋にあるベッドに蓮華を座らせた。

初めて見る蓮華の部屋は普通のワンルームで、これといって特徴的なものもないシンプルな部屋だった。

「大丈夫か？」

加賀美は蓮華を見た。

蓮華は熱っぽい視線を加賀美に向ける。

「あたし…せんぱいに、助けられてばかりですよ…」

「何言つてんだ。…とりあえず着替えるよ。おれは外に出てるから」

「ううん…。ちょっとだけ向こうむいてて」

「…」

蓮華はなんとか着替えを済ませ、ベッドに座った。

「じゃ、おれは帰るから。今日は安静にしてるんだぞ」

「はあ…」

甘ったるい声で蓮華が答え、見送ろうと立ち上がったその時、蓮華は再び倒れそうになった。

「お、おい」

慌てて加賀美が蓮華を支える。

正面から蓮華が倒れこんできたため、加賀美は蓮華を抱きとめる形になった。

「う、ごめんなさい…」

「無理すんなよ」

そのまま加賀美は蓮華を抱き上げてベッドに寝かせた。

「じゃ、もう見送りとかいいいから」

言い置いて加賀美は離れようとする。

しかし、蓮華の手が加賀美の腕を掴んだ。

「高鳥…?」

「せんぱい…少しだけ、あと少しだけ、あたしのそばにいてください…」

懇願するような蓮華の目に、加賀美は腰をおろした。

「うふふ…」

蓮華は嬉しそうに口の中で笑うと、おとなしくベッドに潜り込んだ。

が、加賀美が再び立ち上がると、途端に不安な表情になった。

「せんぱい…？」

「…心配すんな。おまえのそばにいるよ。おまえさえよければ」

蓮華の顔が真っ赤になった。

程なくして、加賀美は水を汲んだ桶とタオルを持ってきた。

タオルを絞って、蓮華の額を冷やす。

「うふふ…」

また蓮華が笑った。

「嬉しいな…」

「何が？」

「せんぱいが看病してくれるのが」

横になって、蓮華は幾分か元気になっていた。

「そうか…。まあ、おれに看病されるよりは天道のほうがよかった
だろうけどな」

「そんなことはありませんよ…だって、あたしは…」

言いかけて蓮華は少し咳こんだ。

「いいから寝てろよ。どこにも行かないから心配すんな」
加賀美は蓮華に布団をかけて、髪を優しく撫でてやった。

「せんぱい……」

蓮華は眠りに落ちていった。

「おやすみ、蓮華……」 眠ったことを確認して、加賀美は呟いた。

第19話（前書き）

（前回まで）

ソフトウェアメーカーの営業マンである加賀美新は、後輩の高鳥蓮華と共に新しいソフトのマニュアルを完成させます。

しかし、そんな折蓮華はオフィスで熱を出して倒れてしまいました。加賀美は蓮華を連れて病院へ行き、彼女を介抱するのです。

第19話

「おやすみ、蓮華…」

加賀美が呟いた次の瞬間、蓮華が目を開けた。

「う…？」

加賀美は焦った。

眠ったのではなかったのか？聞かれたか…？

「…せんぱい、今、蓮華、て言いませんでした…？」

「い、言っていない言っていない」

加賀美は慌てて否定する。

「いや、確かに聞きましたよ。あたしのことを蓮華って…」
体を起こしかけて蓮華はまたふらついた。

「ほら、まだ寝てなきゃ」

加賀美は蓮華を寝かしつけた。

「せんぱい…優しい…」

嬉しそうに蓮華が言う。

「いいから、寝ろ」

「あたしが眠るまで、そばにいてくれる？」

蓮華は甘えるように加賀美に言った。

「ああ」

「よかった。ほんととは、ずっとそばにいてほしいんだけど…って、あたし何言ってるんだろ。ごめんなさい、風邪ひいてるからあたし

…」

加賀美は、そんな蓮華がいじらしく、そして愛しく思った。

「ま、まあ、あれだ。気にすんな。天道じゃなくて悪いけど、おまえのそばにいてやるから」

すると蓮華は悲しげな瞳で加賀美を見た。

「どうして…？どうしてせんぱいは、いつもそんなことばかり言うんですか…」

「だって、おまえ天道のことが好きだろ」

「ちがいます。あたしが好きなのは…」

「いいから寝ろよ」

加賀美はまた蓮華に布団をかけた。

「おれだって、ずっとおまえのそばにいてやりたいんだ」

蓮華の目が大きく見開かれた。

「…どうして…？」

「何が？」

「せんぱい、あたしのそばにずっといたいんですか…？どうして…？」

加賀美はしまったと思った。

「と、とにかく病人は黙って寝ろ。いいな」

「…せんばいがそばにいないと眠れません」
仕方なく加賀美は蓮華に近付いた。

「さっきみたいに、髪を撫でてください」

加賀美は言われた通りに髪を撫でた。

「うれしい…」

蓮華は嬉しそうに目を閉じた。

「あたしが眠るまで、どこにも行かないでくださいね…」

「わかってるよ」

加賀美は、蓮華が寝息を立てるまで髪を撫でた。

ややあつて、加賀美は会社に電話を入れた。今日は直帰するのと、何かあったら連絡をくれ、という旨を伝え電話を切った。

蓮華は眠ったままだ。

夕方になり、蓮華は目を覚ました。

眠ったからか、体も少し軽い。

辺りを見回したが、加賀美はいなかった。

蓮華はとてつもなく寂しい気持ちになった。

いないのが当たり前なのだが、眠る前にいた加賀美が起きたらいなくなっている事実が、蓮華には悲しかった。

「せんぱい…」

加賀美を想う気持ちは抑えられない。

今日の加賀美の態度を見れば、脈はあると考えてもいい。

しかし、それならなぜ加賀美はいなくなったのだろう。

蓮華は、水を飲もうとふらつく足取りでキッチンに立った。

と、そこへ玄関が開いて加賀美が入ってきた。

「おまえ、何やってんの」

加賀美はまるで自分の家のような感覚で蓮華の部屋に帰ってきた。

「せ、せんぱいこそ…」

「寝てなきゃダメじゃないか。ったく、目を離すとすぐこれだ」

蓮華は嬉しくなった。

あの加賀美が帰ってきてくれた。

「せんぱい…!」

蓮華は甘えるように加賀美に抱きついた。

「お、おい…どうしたんだよ」

「だって…だって寂しかったんですもの…。起きたらせんぱいなくって…」

「おまえ眠ったから…」

「でも帰ってきてくれたから、うれしくて…」

加賀美は、そんな蓮華の髪をまた撫でた。

「えへへ…」

蓮華が嬉しそうに加賀美に寄り添う。

だが、加賀美はそのまま蓮華を抱き上げてベッドへ連れて行き、寝かしつけた。

「…きゃ！」

「おとなしく寝てなきゃダメだろ」

「はい…」

「今から夕飯作るから、待ってる」

加賀美の足下にはスーパ―の袋があった。

「おまえ毎日何食ってたんだ。冷蔵庫カラじゃないか」

「せんぱい作ってくれるんですか？うれしいな」

「おかゆだぞ…」

それから加賀美は、蓮華の部屋でおかゆを作り、蓮華に食べさせた。

「うふふ…おいしいですう…」

蓮華は終始、幸せそうな表情だった。

「せんぱいって…優しいですよ…。ねえ、せんぱい…あたし、ずつとせんぱいに言いたいことがあったんです。…聞いてくれますか」
加賀美は身を固くした。

「待ってくれ、先におれに話をさせてくれないか」

「…？」

「樹花ちゃんとの間に何があったか、先に話させてくれ」

蓮華は樹花のことを忘れていた。
そういえば、何かあったのだ。

「…はい」

「単刀直入に言う。樹花ちゃんに、あの日おれは、好きだと言われた」

「……！」

蓮華は目の前が真っ暗になった。

そうか、だからあの日加賀美は様子がおかしかったのか。

「よ、よかったですね」

蓮華はようやく言葉にした。

だが加賀美の答えは意外なものだった。

「おれは、樹花ちゃんを受け入れなかった」
「…どうして？」

「おれには、他に好きな人がいるから」

岬のことか。

結局は岬には勝てないということだろう。

「言つとくけど岬さんじゃない」

「…え？」

蓮華は胸が高鳴るのを感じていた。

第20話（前書き）

今回が最終回です

第20話

「おれは、岬さんが好きなんじゃないんだ」

加賀美は蓮華を見つめて言った。

蓮華はこのとき、岬と樹花以外で加賀美が好きになるような人物を知らなかった。

…まさか…

「高鳥…、おれは、おまえのことが好きなんだ…」

加賀美は顔を赤くしながら蓮華に告げた。

「ま、まあ…、こうやって、おまえの世話焼いてたら、モロバレだろうけどな」

蓮華の目を涙が伝った。

「風邪ひいてるおまえにこんなこと急に言われても困るよな。…とまあ、そういうわけだから、はは…」

加賀美はそう言って、食器を片付けようと立ち上がった。

が、蓮華の手が加賀美を掴む。

「高鳥…？」

「あたしの気持ち…聞かないんですか？」

「いや、だっておまえ、天道が…」

加賀美は蓮華の手を優しく払いながら食器を足下に置き直した。

「…今度は、あたしの話、聞いてください…」

「あ、ああ…。そうだったな」

蓮華に促され、加賀美は座った。

「あたし、せんぱいに言いたいことがあったんです。…あたし…、あたしね…、前も言ったけど、歓迎会の日にせんぱいに庇ってもらって、すごく嬉しかった。それからずっと、あたしをせんぱいは助けてくれて…。前に送ってくれた時も、あたし、嬉しかった。…そういう態度もしてだし、あたし…もう気付かれてると思ってました」

「…」

加賀美は黙って聞いている。

「あたし…、あたしもせんぱいのことが好き…。あの日からずっと、せんぱいのことが好きです…。でも、せんぱいは岬部長の話ばかりして…。あたし、せんぱいが岬部長や他の女の人と楽しそうに話してるの、嫌だった。それであたしも、気持ちを抑えてきたんだけど、もう、抑えられなくて…。ずっと言いたかったのに、せんぱいは気付かなくて…」

「そう、だったのか…」

加賀美は、蓮華を抱きしめた。

「おまえ、天道のことは…？」

「あれは、せんぱいにやきもち妬かせようと思って。あたしばかり岬部長にやきもち妬くの、なんか嫌で…」

加賀美は更に強く蓮華を抱いた。

「せんぱいは…、岬部長のことは、いいんですか？」
加賀美の肩越しに蓮華が聞いた。

「おれ、わかつたんだ。何も飾らずにおまえの前だと自然体でいられるって…。なんでも思ったこと言えるのって、おまえの前だけだ
って」

「…せんぱい…、それじゃ、ずっと、あたしのそばにいてくれます
？」

蓮華から体を離して言った。

「ああ…、ずっと、おまえのそばにいるよ、蓮華」
「うれしい…」

加賀美と蓮華は再び抱き合い、そしてどちらからともなくキスをした。

天道の結婚式の日がきた。

加賀美は蓮華を連れて出席し、蓮華はその日加賀美を介して初めて樹花に会った。

「あなたが高鳥さん？」

樹花の挑発的なまなざしを蓮華は受け流した。

「ふーん…。加賀美さん、こういう人がいいんだ」

加賀美は頭をかきながら「ああ」と答えた。

「まあ、いいや。今日は高鳥さんに会えてよかった。私は加賀美さんを諦めないし、高鳥さんにも渡したつもりもないから」

樹花は言いながら背を向けた。

「…お幸せに。とりあえずは」

樹花の目には涙が浮かんでいた。

式が始まり、正装の天道とその妻の旧姓・岬が入ってきた。

「きれい…」

加賀美の隣の蓮華が声をあげる。

「ねえ、せんぱい、あたしも、ああいうの、着たいなあ。あたしも」

甘えるような蓮華を「人前だぞ」と加賀美は制して、しかし

「おれは、ずっとおまえのそばにいるよ」

と答えた。

加賀美は目の前の席表を見た。

加賀美新

高鳥蓮華

今は他人の二人だが、いつか誰かの結婚式に呼ばれる時は、二人は同じ姓になっているだろう。

加賀美は蓮華を見た。

蓮華も加賀美を見つめた。

気恥ずかしくなって加賀美は笑った。

「…なんですか」

少しむくれて蓮華が言う。

二人はこれからずっと一緒だと、そんな未来を想像し、加賀美はまたも笑った。

第20話（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。

もともと、「仮面ライダーカブト」の加賀美と蓮華のカップリングが好きだったんで、そんな二人のラブコメが読みたいなあ、というのが始まりでした。

が、どこにもその手の話がなかったんで、それならば、と書くことにしました。

もっとも、文章的にもストーリー的にも反省点が多かったと思います。

（たとえば、「スタッグビートル」の意味が不明な点とか）

何はともあれ、完結できてよかったです。

ご愛読ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4253j/>

チェンジ・スタッグビートル

2010年10月14日14時08分発行